

## 【本文】

次の文章は江戸時代に書かれた荒木田麗女の歴史物語「月のゆくへ」の一節である。平安時代、福原への遷都が行われて数か月後、大将藤原実定は旧都の平安京に留まっていた妹の太皇太后を訪ね、そこに仕える女房小侍従のもとに泊まる。読んで、後の問い合わせよ。

大将はしばしさぶらひて立ち給へるままに、小侍従の君のもとに泊まり給ひぬ。A(かくわざと詣で給へるも、多くはこの人によりてなれば、浅からぬさまに語らひ給ふ)。「逢ひしあへば」といふめる秋の夜の、げにいとく明けぬる心地して、暁の別れも常より身にしみておぼえ給へば、X(かたみに)袖のみ露けてやすらはれ給へど、明け果てなむもY(はしたなくて)、泣く泣く出で給へり。B(女もことにいみじき朝けの姿を遙かに見送りて立つて)。大将も飽かずのみ思いてかへり見がちなるを、御供なる経尹、あはれに心苦しう見参らせけるが、立ち返り、女のZ(うちながめて)ある所によりて、

C(ものかはと君がいひけむ言の葉の今朝しもなどか悲しかるらむ)

これは大将の通ひ給ふころ、いつの時にか小侍従、

待つ宵にふけゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

と詠みたりけるを、思ひいでてなむ聞こえけるなめり、D(いみじうも仕うまつりける、とて大将ことほめ給へりし)とぞ。

(注)

1 逢ひしあへば…

「秋の夜も名のみなりけり逢ひしあへばことぞともなく明けぬるもの」(古今和歌六帖・小野小町)による。長いものと言われる秋の夜も、恋人と逢うとなると早く明けてしまうことを述べる。

2 待つ宵にふけゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかは…

この和歌が評判になったことで、小侍従は「待つ宵の小侍従」と呼ばれるようになった。本文中の和歌「ものかはと……」は、この和歌を踏まえたものである。

【問題】

問一

傍線部X～Zの現代語訳として最も適切なものをそれぞれ一つずつ選び、マークせよ。

X かたみに

1. 互いに
2. 代りに
3. 形見の
4. 片方の

Y はしたなくて

1. 思いがけなくて
2. 残念で
3. 思いやりが深くて
4. 体裁が悪くて

Z うちながめて

1. 遠くを見渡して
2. しんみりと物思いにふけって
3. 和歌を口ずさんで
4. ぼんやりとうつむいて

問二

傍線部A「かくわざと詣で給へるも、多くはこの人によりてなれば、浅からぬさまに語らひ給ふ」の解釈として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

1. わざわざ皇太后宮に参上なさったのは小侍従に会いたかったからで、愛情深い様子で小侍従と語り合いなさった。
2. わざとらしく小侍従のもとにやって来たのは妹に会いたかったからで、親身になって妹に語り聞かせなさった。

3. わざわざ参詣したのは妹の幸せを願っていたからで、妹にしっかり仕えるよう小侍従に念入りにお頼みになった。
4. わざとらしくやって来たのは小侍従の機嫌を取るためで、心変わりしないよう小侍従に念入りに言い聞かせなさった。

### 問三

傍線部B「女もことにいみじき朝けの姿を遙かに見送りて立てり」の解釈として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

1. 小侍従は特にすばらしい明け方の庭の趣深い景色に、いつまでも見とれて立っていた。
2. 小侍従も特にすばらしい明け方の月の美しさの中で、大将をいつまでも見送って立っていた。
3. 小侍従の格別すばらしい明け方のなまめかしげな表情に、大将はいつまでも見とれて立っていた。
4. 小侍従も格別すばらしい明け方の大将の帰りぎわの様子を、いつまでも見送って立っていた。

### 問四

傍線部C「ものかはと君がいひけむ言の葉の今朝しもなどか悲しかるらむ」の解釈として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

1. あなたが来てくれないかもしれないと心配しながら待つ宵の鐘の音のつらさはものの数でもなく、今朝告げられた別れの言葉がなぜこんなに悲しいのでしょうか。
2. あなたに今朝告げられた別れの言葉のつらさはものの数でもなく、あなたが来てくれないかもしれないと心配しながら待つ宵の鐘の音がなぜこんなに悲しいのでしょうか。
3. あなたは、恋人を待つ宵の鐘の音にくらべれば別れを告げる鳥の声はものの数でもないといっていましたが、今朝はなぜ別れを告げる鳥の声がこんなに悲しいのでしょうか。
4. あなたは、別れを告げる鳥の声にくらべれば恋人を待つ宵の鐘の音はものの数でもないといいましたが、今朝はなぜ別れを告げる鳥の声がさほど悲しくないのでしょうか。

### 問五

傍線部D「いみじうも仕うまつりける、とて大将ことほめ給へりし」の解釈として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

1. あの時は素晴らしい和歌を詠んだものだ、と大将は小侍従を格別にお褒めになった。
2. おまえは素晴らしい和歌を詠んだものだ、と大将は経尹を格別にお褒めになった。

3. 素晴らしい和歌を詠んだものだ、と小侍従は大将に経尹のことをたいそうお褒め申し上げた。
4. あの時は素晴らしい和歌を詠んだものだ、と経尹は大将をたいそうお褒め申し上げた。

## 問六

『月のゆくへ』は江戸時代に書かれた歴史物語であるが、平安時代に書かれた歴史物語を一つ選び、マークせよ。

1. 『蜻蛉日記』

2. 『とりかへばや物語』

3. 『大鏡』

4. 『古今著聞集』

## 【解説】

・問一:X-1、Y-4、Z-2

・問二:1

・問三:4

・問四:3

・問五:2

・問六:3

## 【ポイント解説】

### 問一:重要古語の判別

中堅私大では「単語帳の1・2番目の意味」がそのまま問われる。

・X:かたみに(互いに)

漢字で書くと「互に」。現代語の「形見」に引きずられてはいけない。頻出単語だ。

・Y:はしたなくて(体裁が悪くて)

「はしたなし」は、中途半端で「きまりが悪い」「落ち着かない」という意味。ここでは「夜が明けきつてしまふと(人目もあり)きまりが悪い」という文脈を読み取る。

・Z:うちながめて(しんみりと物思いにふけって)

「眺む」は単に視覚的に見るだけでなく、「物思いに沈みながらぼんやり見る」という意味が重要だ。

### 問二:文脈判断

「わざと」は現代語の「故意に」ではなく、「わざわざ／格別に」というプラスの意味で使われる。また「この人」が直前の「小侍従」を指していることに気づけば、正解は1に絞られる。

### 問三:動作主(主語)の把握

「いみじき朝けの姿」は誰の姿か。古文では「美しい」とされるのは基本的に高貴な男性(ここでは大将)の立ち去る姿だ。「見送りて」いるのは「女(小侍従)」である。主語と客体を混同しないことが重要だ。

#### 問四：和歌の「本歌取り」と「踏まえ」

この問題の核だ。注釈を最大限に利用せよ。

- ・小侍従の旧歌：「待つ宵の鐘に比べれば、別れの鳥（鶴の声）なんてものかは（問題ではない）」
- ・経尹の歌（傍線部C）：「あなたは以前、鳥の声なんて『ものかは（何でもない）』と言っていたのに、今朝はどうしてそんなに（鳥の声が）悲しいのでしょうか」

注釈2にある通り、小侍従がかつて「別れの鳥の声なんてつらくない」と詠んだことを踏まえ、経尹が「今日はあんなに泣いているじゃないですか（矛盾していますね）」と、機転を利かせてからかいつつも共感している場面だ。

#### 問五：敬語と人間関係

「仕うまつる」は「（歌を）お詠み申し上げる」という謙譲語。ここでは、供の者である経尹が、主君である大将やその相手の小侍従のために、機転の利いた歌を献じたことを指す。

それを「大将」が「（経尹は）見事に詠み申し上げたものだ」と褒めている文脈だ。したがって、褒められた対象は経尹である。

#### 問六：文学史

文学史は得点源にしよう。龍谷でも出るし。

- ・『大鏡』：平安後期、四鏡の最初。歴史物語。これが正解。
- ・『蜻蛉日記』：平安中期、日記。
- ・『とりかへばや物語』：平安末期、作り物語。
- ・『古今著聞集』：鎌倉時代、説話集。

#### 【アドバイス】

このレベルの読解で最も大切なのは、「注釈を無視しないこと」。中堅私大的設問者は、注釈をヒントに和歌の解釈をさせる問題を好む。本文を自力で全訳しようとしてパンクするのではなく、注釈と本文のズレやつながりを探す訓練を積んでほしい。

## 【現代語訳】

大将(藤原実定)は、しばらく(太皇太后の御前に)お仕えして立っていらしたが、そのまま小侍従の君の所に泊まりなさった。(A:このようにわざわざ参上なさったのも、その大部分はこの人(小侍従)に会うためであったので、愛情の深い様子で語り合いなさる。)

「逢いしあえば(逢ってみると、秋の夜もすぐに明けてしまう)」と詠まれている秋の夜が、本当にたいそう早く明けてしまった心地がして、夜明けの別れもいつもより身に染みて感じられなさったので、(X:互いに)袖ばかりが(涙で)露に濡れたように湿って、名残惜しくしていらしたが、すっかり夜が明けてしまうのも(Y:体裁が悪い)ので、泣く泣くお出ましになった。

(B:女(小侍従)も、格別にすばらしい大将の明け方の姿を、はるか遠くまで見送って立っている。)

大将も名残惜しくばかり思って、何度も振り返りがちであるのを、お供の経尹(つねまさ)が、しみじみと氣の毒に拝見していたが、(女の所へ)引き返し、女が(Z:物思いにふけってぼんやり眺めて)いる所の近くに寄って、

(C:「ものの数ではない」とあなたが(以前の和歌で)おっしゃったその言葉が、今朝に限ってどうしてこんなに悲しく感じられるのでしょうか。)

これは、大将が通っていらした頃、いつの時だったか小侍従が、

「(恋人を)待つ宵に更けていく鐘の音を聞くときに比べれば、飽き足りない思いで別れる朝の鳥の声など問題ではありません」

と詠んでいたのを、(経尹が)思い出して申し上げたのであるようだ。(D:「実に見事に(歌を詠んで)お仕えしたものだ」と言って、大将は格別にお褒めになった)ということだ。